

# 2025海外経済産業視察

## ドバイ

〈テーマ〉

未来都市ドバイ～世界的観光都市の創造と魅力を学ぶ～

2025年10月20日(月)～25日(土)



埼玉経済同友会  
国際委員会

# CONTENTS

---

- 2 団長所感 砂漠の奇跡と文明の源流－対照的国家から学ぶ持続的成長  
国際委員長 谷澤 薫

- 3 行程表

- 4 海外経済産業セミナー

〈テーマ〉中東・ドバイの経済概況と日本企業のビジネス動向

〈講師〉JETRO調査部 中東アフリカ課 課長 内田 政義 氏

## ドバイ

- 7 ドバイ未来財団・未来博物館 ドバイの未来の姿  
10 JETROドバイ事務所 ドバイの経済概況と生活実態  
12 在ドバイ日本国総領事館 UAE及びドバイの概況  
13 ドバイ経済観光局 ドバイの経済施策  
15 ドバイホールディングス(ナキール社) 人口島プロジェクト  
17 TOPICS 1 ドバイ観光

## エジプト

- 20 TOPICS 2 エジプト観光

- 
- 22 TOPICS 3 ドバイ・エジプト あれこれ

- 23 参加者名簿
- 

### 【表紙写真】

- 〈左上〉ドバイ未来財団のエリア・アルムール氏と谷澤委員長  
〈右上〉在ドバイ日本国総領事館にて記念撮影  
〈左下〉ドバイデザートサファリにて記念撮影  
〈左下〉環境・技術研究センター(Ciemat)での会議風景  
〈中下〉世界最大の額縁ドバイフレーム  
〈右下〉世界最大の超高層ビルブルジュ・ハリファにて記念撮影

## 団長所感

### 「砂漠の奇跡と文明の源流—対照的国家から学ぶ持続的成長」

国際委員長 谷澤 薫

今回、「未来都市ドバイ～世界的観光都市の創造と魅力を学ぶ」をテーマに、埼玉経済同友会 2025 海外経済産業視察として世界でも注目を集める国際都市ドバイと、四千年の歴史を有するエジプトを訪問する機会を得ました。10月19日(日)の夜、成田空港を出発し10月25日(土)夕方に帰国という行程でしたが、ドバイでは未来を彷彿させる数々の世界一を体験し、エジプトでは悠久の歴史を体験しました。対照的な二つの地域を訪れたことは、国際委員長として非常に示唆に富む経験となりました。

まずは、お忙しい中、日程を調整してご参加いただいた福岡代表幹事をはじめとする会員の皆様へ感謝申し上げます。

ドバイでは、最初の訪問先であるドバイ未来財団でご挨拶として名刺を出すと「こちらではそういうものはありません」と言われ出鼻をくじられました。ドバイでは名刺のやり取りは紙ではなくすべてスマホで行っているのです。その他、ブルジュ・ハリファ、ドバイフレーム、ドバイモールなど「世界一」を体現する数々の施設を視察し、同国が明確な国家戦略のもと、未来志向で都市と産業を構築している姿を強く実感しました。また在ドバイ日本国総領事館、ジェトロ、ドバイ経済観光局を訪問し、現地における日本企業支援の体制や、日本とUAEとの経済的結びつきの強さを改めて認識しました。さらに、パーム・ジュメイラ開発を手掛けたナキール社を訪問し、観光・商業施設の今後の開発構想について直接説明を受けたことで、長期的視点に立った都市開発と官民連携の重要性を学ぶ貴重な機会となりました。



一方、エジプトではギザのピラミッドやスフィンクスにおいて通常では立ち入ることのできない場所まで案内いただき、人類の歴史と文明の奥深さを肌で感じました。さらに、正式オープン前の大エジプト博物館を特別に見学し、日本語が堪能な現地ガイドの丁寧な説明を通じて、エジプトが自国の歴史遺産を国家の誇りとし、将来に向けた観光・文化戦略として位置付けていることを強く印象づけられました。

急速な発展を遂げている未来都市ドバイと、悠久の歴史を今に伝えるエジプト。この両極ともいえる地域を訪問したことで、「変化を恐れず未来を描く力」と「歴史や文化を礎として価値を継承する力」の双方が、国や都市の持続的発展には不可欠であることを改めて認識しました。

今回の視察で得た知見と国際的な視野を同友会として共有し、今後の国際交流や地域経済の発展、そして同友会会員企業が共に成長していくことが重要であると改めて強く感じた7日間となりました。国際委員会委員長として、今後も会員の皆さまにお役立ちいただけるよう有意義なカリキュラムを提供していきたいと思っております。

# 埼玉経済同友会「2025 海外経済産業視察」 行程表

日程: 2025年10月20日(月)～2025年10月25日(土)

行程表 埼玉経済同友会 2025年海外産業視察					
	都市	移動手段	時間	日程	
1日目 10/19	成田	EK319	20:30	成田空港集合	
			22:30	空路にてドバイへ	
2日目 10/20	ドバイ	専用車	4:50	ドバイ空港到着	
			6:15	ガイドと合流し、ホテルへ	
			7:00	ホテルへチェックイン 朝食後、お部屋で休憩	
		専用車	9:30	ホテル出発	
			10:00-10:45	アル・ファヒディ歴史地区 散策	
			11:00～12:00	スーク 散策・買い物	
		専用車	12:10～12:20	アブラ船 乗船	
			12:30-12:50	アル・シーフ	
			13:00-14:30	昼食(AI Khayema/エミレーツ料理)	
			15:00-16:30	ドバイフレーム 入場 ドバイモールへ移動	
			17:00	ドバイモール到着→散策・買い物	
			18:00	ドバイファウンテン 見学	
専用車	18:30-20:00	夕食(Bice Mare / イタリアン)			
	20:00	ホテルへ移動			
	20:30	ホテル到着 宿泊: JW マリオット・マーキース・ホテル			
3日目 10/21	ドバイ	専用車		ホテルにて朝食	
			9:00	ホテル出発 ドバイ未来財団へ移動	
			9:20	3Dプリンター建築にて下車後、未来財団へ	
		専用車	09:30-10:15	ドバイ未来財団にてセミナー	
			10:30-12:00	未来博物館 入場	
			12:30-14:30	昼食(Tomo / 和食会席) 12:30～ ジェトロドバイ2名によるセミナー 13:00～ 会食	
			14:30	ホテルへ一旦戻る	
			15:00-16:00	お部屋にて休憩・着替え	
			16:00	ホテル出発	
		4WD	17:00-17:15	トイレ休憩・タイヤの空気抜き	
			17:15-17:45	砂漠体験・写真撮影	
			17:45-18:00	トイレ休憩・タイヤの空気入れ	
専用車	19:00-21:00	夕食( Al Hadeerah / BBQスタイル)			
	21:00	ホテルへ移動			
	22:00	ホテル到着 宿泊: JW マリオット・マーキース・ホテル			
4日目 10/22	ドバイ	専用車		ホテルにて朝食	
			9:30	ホテル出発	
			10:00-11:30	ドバイ領事館	
		専用車	12:00-13:30	昼食(Shang Palace/ 中華)	
			13:30	ドバイモールへ移動	
			14:30-15:45	ブルジュ・ハリファ 入場	
			16:00	ドバイ経済観光局へ移動	
			16:30-17:30	ドバイ経済観光局 セミナー(通訳あり)	
			18:00	ホテルへ到着	
		専用車	18:30	夕食( Prime 68 / イタリアン・ステーキ)	
				宿泊: JW マリオット・マーキース・ホテル	
5日目 10/23	ドバイ	専用車		ホテルにて朝食	
			8:15	ホテル出発	
			9:00-10:15	ナキール社 訪問(通訳あり)	
		専用車	10:15	バーム・ジュメイラ展望台へ移動	
			10:30- 11:30	バーム・ジュメイラ展望台 入場	
			11:30	ドバイ空港へ移動	
			12:15	ドバイ空港到着 チェックイン・手荷物預け等	
			15:15	各自、空港内で昼食 空路にてカイロへ	
			18:05	カイロ空港到着 空港アシスタントと合流し、ビザ対応あり	
		カイロ	19:05	ガイド(MR Emad Elgabry)と合流し、空港出発	
			20:00	夕食( Bullona restaurant /和食創作料理)	
			21:00	ホテルへ移動	
ギザ	21:30	ホテル到着 宿泊: シュタイゲンバルガー・ピラミッド・カイロ・ホテル			
6日目 10/24	ギザ	専用車		ホテルにて朝食	
			9:00	ホテル出発	
			9:10-9:45	パピルスショップ	
		専用車	10:00-12:00	大エジプト博物館 入場 <<特別開館入場>> ※11月1日の正式オープン前に入場 ピラミッドエリアへ入場	
			13:00-14:00	昼食(Khufu restaurant/エジプシャンフレンチ)	
			14:00-16:00	スフィンクス クフ王のピラミッド入場	
			17:00	カイロ空港 到着	
			20:05	空港到着後、チェックイン・手荷物預け 空路にてドバイへ	
			0:40	ドバイ空港到着→乗り継ぎ	
		ドバイ	EK318	2:40	空路にて日本へ
7日目 10/25	成田		17:35	成田空港到着 入国手続き後、解散	

---

## ドバイの最新経済情勢を学ぶ

---



9月24日(水)、国際委員会(委員長:谷澤薫氏)主催海外経済産業セミナーが、「ドバイの最新経済情勢を学ぶ」をテーマに会員と関係者合わせ46名の参加によりリアル&オンラインにて開催された。

冒頭、谷澤委員長は「今回訪問するドバイは埼玉県とほぼ同じ面積を有するUAE最大の都市。中東に位置していることから、潤沢なオイルマネーで経済発展しているイメージがあるが、実は石油に依存することなく積極的なインフラ整備を通じてビジネス環境や観光資源等を整え、その結果、中東における貿易・商業の最大の中心地、そして世界的観光都市と呼ばれるまでに発展を遂げてきたのである」「一人当たりのGDPは日本の1.5倍以上と非常に魅力的なマーケットを有しており、日本企業の進出余地はまだ大きい。是非本日の講話を通じて今後の企業経営の参考としていただければ幸いである」と挨拶された。

当日はジェトロ調査部中東アフリカ課長の内田政義氏から「中東・ドバイの経済概況と日本企業のビジネス動向」と題して講話をいただいた。

---

### 「中東・ドバイの経済概況と日本企業のビジネス動向」

〈講師〉日本貿易振興機構(ジェトロ)調査部 中東アフリカ課 課長 内田 政義 氏

#### ■UAE・ドバイの経済・産業情勢

アラブ首長国連邦(UAE)は建国1971年でドバイを含む7つの首長国による連邦制。宗教はイスラム教、北海道とほぼ同じ面積で人口は1,100万人。うちドバイは386万人と埼玉県の半分で面積は埼玉県とほぼ同じ。経済規模は21.6兆円と埼玉県よりちょっと小さいレベルだ。ドバイの人口は約50年で21倍以上に増加しており2040年には580万人を予想。経済発展に伴って世界中から企業や人を受け入れている。そのため自国民の割合はわずか8%、外国人の比率が92%となっている。また65歳以上の高齢者比率はわずか1%と特徴的な構成だ。因みにドバイ発展の要因はモノ・ヒト・企業・金・情報を呼び込むハブでありショーケース、そしてゲートウェイの役割だ。

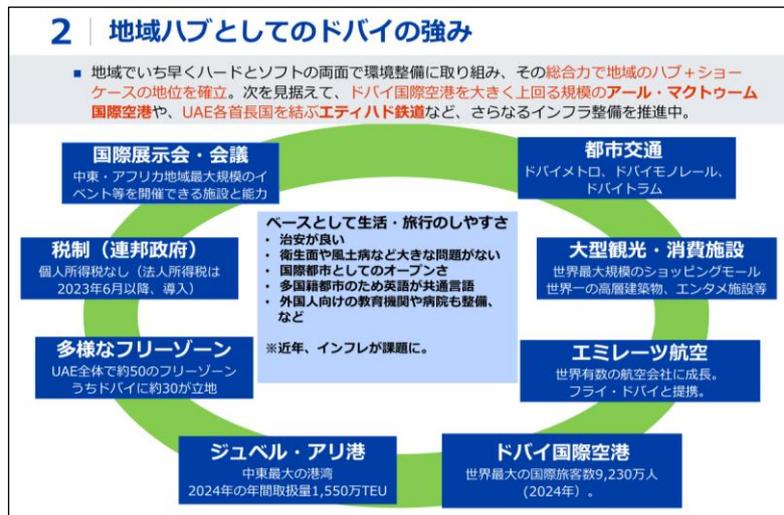


ドバイの発展の礎を創ったのは2代前のラーシド首長。1966年にドバイで石油が発見されたのが一つの契機。しかし資源が少なくすぐに枯渇することが見込まれたため、石油で得られた資金を大胆にインフラ投資に向けたのである。その代表的なインフラがジュベル・アリ港、中東で初めてとなるフリーゾーンもジュベル・アリに開設した。またエミレーツ航空の設立やドバイ空港フリーゾーンの開設等、ハードとソフトを組み合わせた積極的な投資を行った。自然環境や天然資源には恵まれないが、地理的な優位性と大胆な先行投資によって発展してきたのがドバイの歴史だ。

ドバイは世界一・世界最大という言葉に拘って観光誘致をしている。なぜ世界一に拘るのか?と問われたドバイの首長は「2番は誰も知らない。1番でなければ意味がない」と回答したとのこと。都市のブランド

戦略として世界一あるいはここにしかないものを創るのだという取組がドバイの開発のバックボーンになっているのである。観光客の誘致では一般観光客よりもビジネス客の方が経済効果が大きいということで、国際展示会や国際会議を積極的に開催しており、中東アフリカ地域で最大規模の展示会やスタートアップのイベントなどはほとんどドバイで開催されている。そのベースは政治情勢の安定、そして治安が良くて住みやすいということ。世界 200 か国以上の人が住んでおり、外国人向けの教育機関や病院なども整備されている。このような総合的な機能でドバイは地域のビジネスハブとしての機能を確立したと言えるのだ。さらにすごいのが国際旅客数で世界最大のドバイ空港の 3 倍規模のアール・マクトゥーム国際空港を建設中であること。また、

港と航空輸送だけではなくて、UAE 各首長国を結ぶエティハド鉄道も建設中であり、現状に満足せずさらなる追加投資をしているのが現状だ。ドバイのインバウンド数はコロナで激減したが、2021 年にはドバイ万博の開催効果もあり着実に改善、1,800 万人の海外旅行客を受け入れている。この数値は日本の半分だがドバイの人口



が約 400 万人という点を考えると、いかにこの人数が大きいイメージできるのではないかと。因みに西ヨーロッパや GCC あるいは東欧、特にロシアの人たちがお金を落としていく構図になっている。

UAE の GDP であるが約 6 割をアブダビ、約 3 割をドバイが占めている。ドバイでは卸・小売・貿易・運輸産業等がドバイの成長を支えているが、アブダビは半分が石油産業であり「ドバイに追いつけ、追い越せ」ということで脱石油を進めている。このように UAE では脱石油依存・産業多角化を進めているので、非石油部門の実質 GDP は安定して成長し 76%を占める。貿易の状況であるが、輸出ではサウジアラビアやインドが中心であるが輸入では中国の存在感が高まっており約 2 割を占めている。日本は自動車を中心に第 5 位。UAE は貿易の拡大やハブ機能の強化などを目指し、2021 年 11 月以降、包括的経済連携協定 (CEPA) 交渉を推進、2024 年 9 月からは日本と交渉に入っており、最終的には日本を含む 103 か国との締結を目指している。日本との協業では、AI・デジタルや医療、水、食糧安全保障、宇宙など多岐にわたる分野で日本に期待しているところである。こうした取組の新しい軸がイノベーション。政府が積極的にイノベーションハブを構築していこうと戦略を打ち出している。因みに今回視察で訪問予定と聞いているがドバイ未来財団もその一つ。世界最先端の分野を取り入れていく取組により中東地域のスタートアップ企業はどんどん成長しており、多額の資金調達を進めている UAE はサウジアラビアに次ぐ規模の金額調達をしており、件数ではこの地域で最大のスタートアップ受入国となっている。

ドバイは現在、新しい戦略を作って更なる発展を実現しようと取り組んでいる。それが「経済 10 年計画 (D33)」だ。これは 2033 年までの 10 年間でドバイの経済規模を倍増させ、世界トップ 3 都市の地位を確立し、世界で最も住みやすく、働きやすい都市を目指すというもの。貿易や海外直接投資、政府支出など 6 つのアジェンダを掲げ、それぞれに定量的な目標を設定している。またこれを細分化した 100 の変革プロジェクトも立ち上げようとしており、第 1 段階として 10 件のプロジェクトが発表されている。

## ■日本企業の中東・UAE ビジネス動向

日本と中東の貿易関係であるが日本は UAE やサウジアラビアなど産油国からの原油輸入額が大きく大幅な貿易赤字になっている。一方日本からは輸送用機器を輸出しているという構造。なお日本の原油の輸入先としては、これまでサウジアラビアが一番、UAE が二番であったが、去年は UAE が一番となった。因みに日本の UAE 向け食品輸出についてであるが、現地では日本食レストランの需要が高まっており、去年は初めて100億円を超えた。コロナ前は30億円台で推移していたので、コロナ後急速に拡大をしているという状況。これまでは輸出額の大半を清涼飲料水が占めていたが、最近では牛肉、ソース、お菓子、カツオ・マグロ、そして世界的なトレンドに合わせて緑茶の輸出も好調だ。

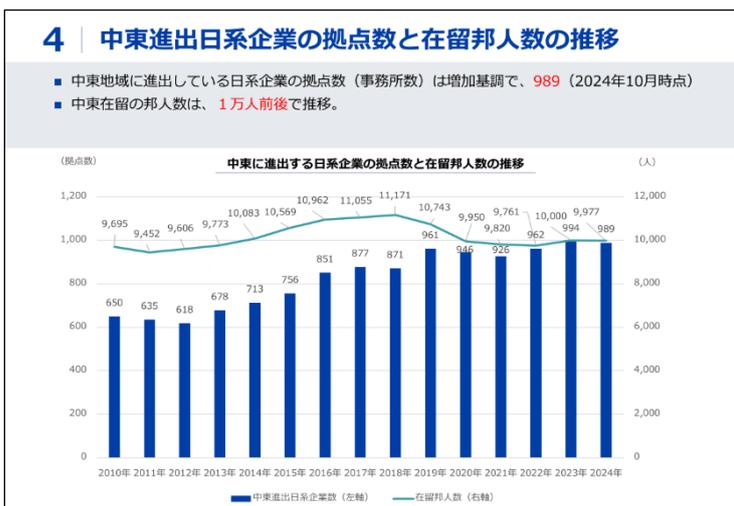
次に中東地域に進出している日系企業の拠点数と在留邦人数の動向であるが、拠点数は2010年代に約600拠点だったのが現在1,000拠点まで増えている。約1,000の拠点の内 UAE は343拠点で最多。ドバイはそのうち301と製造業やサービス産業を中心にビジネスハブとしての役割を担う。在留邦人数は

10,000人位で推移しているが、UAE が中東全体の約半数を占め圧倒的である。

中東進出日系企業の業績であるが、ジェトロのアンケートによれば約7割の企業が黒字であり、世界平均を上回っている。特に UAE は8割が黒字である。今後の事業の方針については約半分の企業がビジネスを拡大していく意向を示している。こちらも世界平均より高いが特に UAE は6割以上となっている。因みに拡大の理由は現地市場ニーズの拡大や輸出の増加だ。また今後有望視する分野は水素や再生可能エネルギーなどの資源・エネルギー、電力・水などのインフラ、食品などの消費市場が上位を占めている。UAE の投資環境の魅力と課題であるが、市場規模や成長性のほか、フリーゾーンや税制面のメリット、生活環境・言語面、安定した政治・社会情勢、インフラの充実が挙げられる一方で、課題としては、不動産賃料の高騰、人件費の高騰、各種手数料の高騰が挙げられる。



最後に内田氏は「アブダビやカタール、サウジアラビアなど周辺諸国や地域も経済・社会開発や改革に取り組みプレゼンスを高めているが、ドバイはスタートアップや AI、先端技術など新たな分野でも積極的な政策を推進している。是非視察ではそういった点をご覧いただければと思う」と述べ講話を締め括った。



---

## ドバイの未来の姿

---

### 【ドバイ未来財団】

ドバイ未来財団(Dubai Future Foundation, DFF)はドバイ政府がイノベーションと未来テクノロジーの推進を目的に 2016 年に設立した組織。ドバイの未来都市開発をけん引する存在として、世界中の先端技術、未来予測、スマートシティ開発などに焦点を当て、持続可能な未来社会の実現に寄与することを目指し、イノベーション・エコシステム構築の強化やスタートアップ企業の育成などを進めている。2023 年には日本科学技術振興機構(JST)と共同研究開発連携についての協力覚書を締結するなど、日本との関りも深い。また同財団が運営する「未来博物館(Museum of the Future)」は、その奇抜な造形と、未来の技術や社会の在り方を探求する場として世界中から注目されている。



当日は当財団のチーフトランスフォーメーションオフィサーのアリア・アルムール氏から同財団設立の目的や同財団の取組状況等について説明をいただいた。

冒頭、ドバイが過去から現在までどのように発展してきたのかをビデオで確認、非常に短い期間で急速に発展してきた様子を垣間見ることが出来た。財団ではセクターごとに未来を分析・調査しているが、未来には様々な変化が想定されるため、その時々で何にフォーカスすべきかを常に模索しているとのこと。また未来と言うと、どうしても技術的な方面に重点を置いてしまいがちであるが、社会生活が基盤になれば決して良い未来は生まれにくい。政府機関に対して、未来に向けてどう準備させるのが財団にとって大変重要な点なのである。なお財団は3年前から「ドバイ未来準備指数」を毎年発表している。これは財団が5つの主要分野についてドバイ政府機関を評価するもの。それぞれの政府機関が、どれだけ未来に対して準備を整えているかを指針として表している。そしてどのセクターが遅れているか、またしっかり準備が出来ているか、そういった点を検証しているのである。

財団の目的は、10年先のドバイを探ること。具体的な取組として、ドバイ・フューチャー・リサーチでは将来のトレンドを掘り下げて戦略を導いている。2年前までこうした研究に特化する機関はなかったとのこと。またドバイ・フューチャー地区基金も準備やリサーチに使える基金が2種類あり人材開発するリサーチと知的財産権の取組に利用されている。ドバイはさまざまなスタートアップが集まり新しいアイデアが集まる場所であるが、彼らは自分たちの知的財産権の有用化に対して知識が足りない点もあることから、知的財産権に関する取扱相談窓口も設置している。例えばスタートアップが新しいことを試すときに、適応する規制がないことがよくあるが、一時的に実証・実装させるライセンスをスタートアップに与え、まずはやらせてみせるのだ。その後どういった規制が必要になるかを一緒に検討していくのである。また必要な規制を作るよう管轄の省庁に提言する機能がある。既にAIやヘルステックの部門で取組が始まっている。

ドバイ・フューチャー・アカデミーでは個人や組織が将来成功するためのスキルと知識を身につけることを目的とした教育プログラムを提供しているほか、今後ドバイ経済に大変貢献できるゲームセクターをサポートするドバイ・ゲームプログラムも展開している。未来博物館は同財団の機関プロジェクト。ドバイ首長が 50 年後の未来をこの博物館で見られるように作ったもの。オープンから 4 年経過しているがすでに 4 百万人の入場者を記録している。



ここで具体的な取組としてドバイ空港の事例とドローンデリバリーの事例を紹介する。大規模で利用者も多いドバイ空港では負荷軽減のため市内各所にミニターミナルを設置しているが、ミニターミナルで出国手続きを済ませそこから直接 DUTY FREE エリアにバスで行ってもらう取組を試験的に行っている。またドローンによるデリバリーについては、特定地域を設定し実際に運用を始めており、どういった規制やルールが必要なのかのテストも行っている。

ドバイ・フューチャー・アクセラレーターズは、新興技術やスタートアップの開発を加速させ、画期的なアイデアを実現するために必要な支援を提供している。10 年前のドバイ政府はスタートアップとのやり取りやアイデアの取り入れには消極的であった。Uber を例に挙げると、ドバイ参入時、すぐ営業活動を始めるのは難しかったが、Uber と一般企業、ドバイ政府の間に同アクセラレーターズが入り、どのようにすれば Uber が早く活動始められるかの検討を行った。因みにこれまで 310 のスタートアップを支援している。

毎年 11 月に開催しているドバイフューチャーフォーラムは今年で 4 年目となるがそこでは未来に関わる人たちが世界各国から参加して未来を語るイベントだ。60 の企業・機関と未来に関わる 1,500 以上の人々がこのフォーラムに参加している。またドバイ・フューチャー・ラボはロボティクスと AI に焦点を当て、ワークショップで実際にものづくりをしている。コロナ時に大きな役割を担った人工呼吸器はここで開発されたのだ。また日本科学技術振興機構 (JST) とパートナーシップを結び、衛星の打ち上げプロジェクトと一緒にしている。

因みにドバイでは政府機関それぞれにチーフ AI オフィサーを設置しており、また UAE では AI 長官も存在しているのだ。

ドバイは 200 もの国籍の人たちが集まる多様な社会でありドバイを良い場所とするために 8 つの原則を定めている。これは地域の事業成長や外国人の受け入れを促進するためのものであり、具体的には優秀な人材の引き寄せを重視することや多様な文化の共存を奨励すること、未来志向であることなどが定められている。これらの原則は、ドバイの経済発展と国際的なビジネス環境の整備に寄与しているのである。

最後にアリア・アルムール氏は「ドバイは世界中でミリオネアやビリオネアが一番集まっている場所。ドバイ空港は中東・北アフリカ地域での最大規模の空港で世界規模では第 2 位。ドバイの観光客は 1,900 万人を超え、グローバルパワーシティ指数 (世界の都市総合ランキング) では 8 位に選出されるなどドバイとしてのブランドを確立している。是非今回の視察でドバイを知っていただきたい」と述べた。

他の UAE 諸国と違い資源が豊富でないドバイが何故ここまで成長したのか？それは政策・産業・インフラ・人材など多方面にわたる戦略がしっかりと組み合っており、またそれらには常に「未来志向」の考えが根底にあると感じた。我が国の成長を考えるうえでも大変参考になる訪問になった。

## 【未来博物館】

未来財団に隣接する未来博物館はオープン前から『ナショナル・ジオグラフィック』で世界一美しい建造物のひとつに選出されるほど大注目のスポット。建物には柱が一切使われておらず、湾曲した建物のファサードは1,024個のパーツが高度な技術によって組み上げられていることから、「工学的にも奇跡」と称賛されている。アラブ首長国連邦建国100周年の2071年を舞台に、持続可能な未来に向けて「宇宙旅行」や「気候変動」「生物多様性」「ウェルビーイング」「スマートシティ」など様々な観点から最新技術を体感できる施設となっている。



訪れた10月21日(火)はインドおよび世界中のヒンドゥー教徒にとって主要なお祭りである「ディワリ」の日。インド系の学生が大勢訪れており、入館に1時間近く要してしまったのは想定外。ようやく入場し乗り込んだエレベーターはまるで宇宙船の内部のようだ。窓には地球からロケットで宇宙に飛び立つ映像が流れており、まるで宇宙ステーションへの旅行を体験するような仕掛けになっていた。また2071年の未来



のドバイの街並みも映し出されていた。エレベーターで上がった5階のフロアは2071年の宇宙ステーション。入場券がわりとなるリストバンドを使うと、宇宙服を着た自分のアバターを作れるコーナーもあるようだが、残念ながら時間がなくそのままスルー。4階は「癒し(HEAL)の研究所」と呼ばれ、2,400種類の動植物の「DNAライブラリー」が陳列されている。専用の端末を借りて動植物のDNAケースにかざすと1つずつ確認することが出来るようになっている。3階は「人間の五感を研ぎ澄ます」フロア。音を聞きながら手に伝わってくる振動を感じるコーナーなどがある。2階は未来の最新技術を紹介しており、6言語を話すAIロボットや、空飛ぶ車・ヘリコプターが展示されていた。



入場に時間がかかったことから、じっくり館内を見学する時間が無かったのは残念であったが、未来を考え取り組むドバイの想いを十分に感じる事が出来た。

## 【3D プリント建築】

ドバイは3Dプリント建築においても先進的な都市として評価されている。ドバイの街中にはすでに3Dプリントされた建築物が多数存在しており、最初に訪れた未来財団の隣には2016年に完成した世界初の3Dプリントオフィス「未来のオフィス(The Office of the Future)」があった。このオフィスは産業用プリンターを使用して1ヵ月足らずで建築され、建物内部には会議室、カフェ、ラウンジなどが設けられている。普及するにはまだ多くの課題が残されているようだが、人手不足や高齢化などの課題を解消する有効な手段であることは間違いない。



---

## ドバイの経済概況と生活実態

---

### 【JETRO ドバイ事務所】

JETRO ドバイ事務所は、アラブ首長国連邦(UAE)をはじめとする中東湾岸諸国と日本との経済・貿易関係の強化を目的に、1981年に設立された。UAE、クウェート、バーレーン、カタール、オマーン、イラク、イエメンの7カ国を管轄し、同地域への輸出や投資を考える日本企業や既進出日系企業への情報提供のほか、市場動向・法制度等の調査、国際見本市での日本パビリオン運営、国際会議開催等の活動を行っている。

当日はジェットドバイ事務所所長の中島紳行氏と、令和5年9月までジェトロ埼玉で勤務されていた調査部長の清水美香氏に昼食会場であるレストラン TOMO にお越しいただき、中島所長からドバイの経済概況や現地での生活実態等について説明いただいた。



現在ドバイには世界最大の国際旅客数を誇るドバイ国際空港があるが、滑走路5本、2億5千万人のお客様が利用できるようにアール・マクトゥーム国際空港を大きく拡張するインフラ計画が進んでいる。また自動車道路は6車線とか7車線の非常に広い道路となっており120kmくらいで走れる有料道路になっている。ゲートを通ると車に付いているバーコードを読み込んでお金が支払われる仕組み。このようにドバイはITを駆使しながら進んでいるのが特徴的なところだ。カードや携帯でお金を支払うことが出来るので現金を持つことはあまりない。

中島氏は携帯電話を無くさないように気をつけながら生活しているとのこと。それはこの国に住んでいる人はエミレーツ ID を持っておりその ID に銀行口座やビザ、パスポートが紐づいているから。中島氏の場合は個人で車を所有しているが車の登録や免許証情報などがエミレーツ ID に紐づかれている。この国からすればどこの銀行口座に残高がいくらあり、車を持っているのか、どの種類のビザで来ているのかなど様々な情報がすぐにわかってしまうのである。因みにドバイは監視カメラがあちらこちらに設置されている。スピード違反をすると車の登録情報と運転者の顔情報により、スピード違反の場所や罰金額が携帯電話に入るのでそのまま罰金を払って完結する仕組みである。ドバイには自国民はわずかしおらず残りはインド、バングラデシュ、パキスタン、エジプト、フィリピンなどいろいろな国の人が仕事のために来ている。監視されていることから悪いことが出来ず結果的に治安はすごく良いのだ。そういう意味では生活しやすいのがドバイである。

道路はどんどん拡張されている。ドバイは人数や車の台数の割に、また車線が5~7車線あるにもかかわらず渋滞が非常に激しい地域、道路をどんどん拡張して渋滞を起こさないように取り組んでいる。しかしそれ以上に人や車が増え、残念ながらインフラ投資をしても渋滞状態は変わらないという状況が続いている。季節によっては30分程度で行けるところが90分程度かかることもざらであり、さらに道路投資を

行っている状況。そういう点が経済を元気にしている要因になっているのである。

ビルの建設が進むなど不動産投資も好調だ。ロシア・ウクライナ紛争によって、ロシアのお金持ちが UAE にどんどん来ているのである。因みに不動産を購入すると 10 年間のゴールデンビザが付与されるのだ。このようにドバイには多くの人が入ってきており、投資をしてインフラを整えて街がどんどん大きくなるという拡大局面になっているのである。ブルジュ・ハリファやドバイフレームなど、世界一の建物を建設することにより観光客が来ており、5 つ星ホテルは今年だけで 15 以上増える計画になっているとのこと。ヒト・モノ・カネが入ってくるという仕掛けになっているのだ。

先日イノベーションの展示会が開催されたが昨年は 20 万人の来場者があった。このように見本市の開催も観光と違うビジネスとして人を呼ぶことに成功している。観光客も昨年は 1,800 万人来ているが毎年 100 万人位ずつ増えており、順調に経済が伸展しているのが今のドバイの状況だ。

最後に中島氏は「変化の激しいドバイであり、5 年後 10 年後のドバイはさらに変わっているのではないかと。是非ともこの景色を見てドバイの経済が良くなっているという点を感じながら視察いただきたい」と述べ説明を終了した。

その後は会員と一緒に食事をとりながら、日系企業の進出状況やドバイの経済概況等説明いただくとともに懇親を図ることが出来た。



## UAE 及びドバイの概況

### 【在ドバイ日本国総領事館】

アラブ首長国連邦第二の都市にしてドバイ首長国の首都ドバイに設置されている。1981 年在ドバイ出張駐在官事務所開設後、1995 年に在ドバイ日本国総領事館として開設された。ドバイ、シャルジャ、アジュマン、ラアスル・ハイマ、フジャイラ、ウンム・ル・カイワイン各首長国を管轄し、在留邦人の保護や通商問題の処理、政治・経済その他の情報収集などを行っている。



当日は一人ずつ厳重なセキュリティチェックを受け、スマホなどの情報機器の持ち込みが禁止された中、必要最小限の荷物だけを持って総領事館に入館。総領事の今西淳氏から歓迎挨拶を受けた後、UAE 及びドバイの概況等について解説いただいた。

その後、領事の細沼学氏からは、アラブ首長国連邦と首長国の関係やアブダビとドバイの比較、ドバイの経済戦略や財政状況、フリーゾーンの概要、ドバイ進出日系企業の動向、ドバイ経済アジェンダ「D33」の概要、ドバイ以外の首長国の概要等について細かく説明をいただいた。

因みに今西総領事は埼玉県の川角出身、県立川越高校、上智大学法学部法律学科を卒業後、1993 年 4 月外務省に入省。大臣官房儀典総括官、東北大学教授、内閣官房副長官補付内閣参事官などを経て、2023 年 9 月、在ドバイ日本国総領事として着任。



厳重なセキュリティチェックの後ということもあり、会員一同当初は緊張した面持ちであったが、冒頭、今西総領事から川越高校在学中の話など埼玉話を披露していただいたことで緊張がほぐれ、終始和やかな雰囲気の中で総領事館を視察することが出来た。



## ドバイの経済施策

### 【ドバイ経済観光局】

ドバイ経済観光局は世界を代表する観光地として商業の中枢を担うというビジョンのもと、ドバイに対する認知度の拡大及び対内投資の牽引を使命としている。ドバイの観光分野における計画、管理、開発、マーケティングにおける主要局。商業分野のマーケティングやプロモーションの他、観光サービスの許認可等を行っており、事業登録・認可の部門や観光・商業のマーケティング部門、経済開発部門など 7 つの部門で構成されている。

当日はドバイ経済観光局 直接投資部門ディレクターのセレーナ・シャラン氏より同局の主要業務について説明を受けた。

冒頭、セレーナ・シャラン氏から初めてドバイを訪問した印象について聞かれた。「ドバイのイメージは高層ビル等が建ち並んで発達しているイメージ。一方でかなりのエリアを占める砂漠のイメージはあまりなく、ドバイに来てこのギャップを強く感じた」との感想を踏まえ、シャラン氏は「ドバイの正確な情報がまだまだ十分に伝わっていないということを改めて理解した」と述べた。

ドバイには今後の経済発展に向けて、2033 年までの 10 年計画で経済を拡大し GDP を 2 倍に増やすドバイ経済アジェンダ「D33」※という計画がある。「D33」には 10 本の柱がありその中には 3 つのグループがある。その中で特に今後成長の可能性が高い重要なセクターを 4 つ特定している。これは GDP を 2 倍にするために一番インパクトを与えるという観点で特定したものである。1 つ目が物流業、2 つ目が先進製造業、3 つ目が金融サービス業、4 つ目が旅行業。因みに旅行業に関しては、世界で 4 番目に訪問客が多い現在のドバイを世界 TOP3 にすることを目指している。物流業に関しては、既にドバイが物流のハブとしての地位を確立しているが更なる成長を目指している。先進製造業に関しては、海外の企業がドバイに製造拠点を設け活動してもらうために、政府としてどこにサポートが必要で、どこにインセンティブを与えるのかを検討している。

ドバイは働きたい場所としてすでに世界で 3 番目の人気を得ているが、デジタル化と生産性がキーワードになっているデジタル経済を強化するために、より多くの才能が集まる場所となるよう様々な取組を推進している。因みに 10 月 6 日にドバイ経済観光局とドバイ商工会議所が共同で「ドバイ・ファウンダーズ HQ」を発足させたが、これは起業家が必要とする支援をすべてワンストップで提供するもの。近隣のホテルを貸切り、オープンスペースを提供している。このオープンスペースはコ・ワーキングスペースやイベントスペースとして活用出来るようになっている。またビジネスを始めるにあたっての規制を改善し、起業家やドバイ進出を考えている人にビジネスしやすい環境を提供するほか、ビジネスを始める際の費用については、他都市に比べ魅力的になるような条件を設定するなどの取組も行っている。またコミュニケーションや



パートナーシップ、インフラについても、より簡便に使いやすく魅力のあるものを提供するように心がけており、2033年までに30のユニコーンと400の起業を目標としている。

他にもドバイ経済観光局ではインベストメント・サポートチームというワンストップの機能を提供しており、ドバイでビジネスをする人がどのようにビジネスを始めればよいのかといったアドバイスやサポートを受けることができるのだ。なお、一番大事なことは生活の質。ドバイはすでに安全な都市になっているが、200以上の国から集まる人々が安全にそして幸せな生活を送ることが出来ることを意識して取り組んでいる。

ドバイが目指しているのは世界の3大グローバルビジネスハブというドバイ独自のポジションだ。キーワードは「ここで成長しここから世界に羽ばたいていく」ということ。ドバイを住みやすく寛容で多様性を持つ場所にする、これがドバイモデルなのである。因みにこのドバイモデルの成長をどのように計るのか。それぞれの政府系機関が指針に沿ったパフォーマンスをもとに、世界No1のゴールにどれだけ近づいているのかを定量的に計っているとのこと。

最後に会員からゴールデンビザとインバウンドに関する質問が出された。ゴールデンビザは2019年に導入された長期居住許可証。このビザを取得するとUAEで制限なく仕事や投資を行うことが出来、10年間の居住が許可される。UAEの不動産を最低200万ディルハム(約8,000万円)以上で購入する人や月3万ディルハム(約120万円)以上の給与を得ている人、200万ディルハム以上の預金残高を保有する人が取得出来る。なお申請にあたっては推薦状を作成する支援もドバイ経済観光局では行っているとのこと。またゴールデンビザを取得するとその家族にもゴールデンビザが付与される。

インバウンドに関してであるが、現在ドバイには1,800万人を超える観光客が来ておりGDPに占める観光業の割合は12%。ホテルの利用率は平均で80%の水準、ホテルの建設は現在もマリーナ地区を中心に続いている。これからの7年間で2万室の客室が増える予定であり、現時点でオーバーツーリズムの問題は発生していないとのこと。

今回ドバイ経済観光局を訪問し直接話を聞くことが出来たが、ドバイの経済発展・成長に果たす政府機関の役割が非常に大きいことを認識するとともに、未来へ向けて明確なビジョンを持つことの重要性を改めて強く感じた視察となった。

#### ※ドバイ経済アジェンダ「D33」とは

ドバイ経済アジェンダ「D33」は、2023年1月4日に発表された10か年の経済戦略。2033年までにGDPを倍増させ、ドバイを「世界トップ3の投資・居住・就労都市」に押し上げることを目標としており、6つのKPIを設定しその達成のために順次100の変革プロジェクトを行う。

因みに6つのKPI項目は①貿易額 ②海外直接投資受け入れ額 ③政府支出額 ④民間セクター投資額 ⑤財とサービスの国内需要額 ⑥DX



## 人工島プロジェクト

### 【ドバイホールディングス(ナキール社)】

ドバイホールディングスは2004年に設立された超高級住宅・商業施設・レジャー施設等の開発を手掛ける政府系持ち株会社。34か国に2,800億ディルハム(約11.2兆円)以上の資産を持ち、世界中に約4.5万人の従業員を擁している。不動産、ホスピタリティ、レジャー&エンターテインメント、メディア、ICT、デザイン、教育、小売、製造と物流、科学など10分野でドバイの成長を牽引し続けている多角的なグローバル投資会社。今回訪問したナキール社はドバイホールディングスの傘下企業で2000年に設立されドバイを拠点とする大手不動産開発会社。ドバイ政府が所有する企業の一つで中東最大級の規模を誇る。



当日はセールス担当のリンリン氏から、ヤシの木の形をした人工島パーム・ジュメイラをはじめ同社が手掛ける不動産等の開発状況について説明を受けた。

ナキール社はミドルクラスから富裕層クラスを対象にした不動産プロジェクトを開発しており「パーム・ジュメイラ」など人工島のプロジェクトなどを手掛けている。ドバイホールディングス傘下の不動産開発会社はナキール社以外にもあり、ドバイ・プロパティーズ社は14棟のタワーマンションやビルから構成されるドバイマリーナを手掛けているほか、メラス社はブルガリブランドのレジデンシャルなどを手掛けている。これらの会社を統括するドバイホールディングリアルエステートは、現在ドバイで一番大きな政府系不動産開発業者となっているのである。

ナキール社が手掛ける人工島プロジェクトはパーム・ジュメイラ、ドバイアイランド、パーム・ジェベル・アリ。パーム・ジュメイラは高級リゾート、ラグジュアリーホテル、ヴィラ、商業施設が集結するエリアとして開発され、世界中の富裕層や観光客が訪れるエリアとなっている。中でもアトランティス・ザ・パームは、この島のシンボリックな存在で、巨大なウォーターパークや水族館を併設している。パーム・ジェベル・アリはドバイの2040年のライフスタイルを具現化する建物だ。オープン時にドバイ首長が来るほどドバイ政府の期待が高いプロジェクト。因みに陸地に近い根元エリアの分譲価格がスタンダードタイプ7ベッドルーム・750㎡でなんと最低価格2,500ディルハム(約10億円)。先端に行けば行くほど高くなるとのこと。

リンリン氏からは、同社で注目のプロジェクトであるドバイデザインディストリクトやシティウォーク等複数



のプロジェクトの物件概要と特徴等についても、映像を用いながら丁寧に説明いただいた。ドバイの超高級物件の販売説明会に参加しているような錯覚に陥った会員が多かったのではないか……。一通りの説明をいただいたのち、パーム・ジュメイラを視察した。

## 【パーム・ジュメイラ】

パーム・ジュメイラは、ヤシの木のような形をしたドバイの代表的な人工島。ヤシの木の幹に当たる部分から枝に当たる部分が 16 本伸びており、それらを囲むように全長 11km もの防波堤が設置されている。560ha の敷地には道路が整備され、枝葉の部分には一戸建てタイプのヴィラが並ぶ。幹の根元は本土と 300 メートルの橋で結ばれており、幹の先と三日月形の防波堤は海底トンネルでつながっている。



パーム・ジュメイラの建設工事は 2001 年 6 月に開始され、2006 年に最初の宅地の分譲が始まった。島を埋め立てるために 9,400 万 m<sup>3</sup> の砂と 700 万トンもの岩石が使われており、深さ 10.5 メートルほどの海底に土砂が投入され、海面上 3 メートルの高さまで積み上げられている。

我々はパーム・ジュメイラの全景を見るべくパーム・ジュメイラを象徴するショッピングモール「ナキールモール」からエレベーターで展望台に上がった。展望台に上がるエレベーター前にはパーム・ジュメイラの開発の歴史や工事の概要等を記したパネルが飾られており、短時間で壮大なプロジェクトが完成したことを学ぶことが出来た。



展望台では快晴のもと、パーム・ジュメイラの全景を見ることが出来、その壮大な景色に参加者一同感動の声があがった。



## TOPICS1 ドバイ観光

### 【アルファヒディ歴史地区】

オールド・ドバイの一角にある歴史的建造物の保護地区。ドバイの街はここから始まったという説があるほど。独特のアラビアンスタイルの伝統的な建築や装飾の建物が立ち並んでおり、19世紀の古き良き時代の面影を残している。約60棟の建物が保存され、一部は文化施設やホテル、アートギャラリーやカフェなどとして使われている。建物の上には一辺の長さが約4mの四角形の形をした煙突のようなものが備わっている。これは上空の空気を取り込み、室内の空気を逃がす「風の塔」と呼ばれるもので、風通しを良くして暑さを凌ぐ、中東ならではの建築スタイル。建物の中に案内されて振る舞われたのはユネスコの無形文化遺産にも登録されているアラビアン・コーヒー。日差しの強いドバイの気候の中で、ちょっと一息入れることが出来た。因みにほのかにスパイスが香るさっぱりとした味わいだった。



### 【スーク】



オールド・ドバイ(旧市街)を流れるドバイクリーク(運河)を渡る際に乗ったのがアブラ船と呼ばれる渡し船。乗船料は1AED(アラブ首長国連邦ディルハム 日本円で約40円)。乗船時間は約5分。渡った先はドバイ3大スークの1つスパイス・スークがある Deira Old Souq Station。スパイス・スークはその名の通りスパイス屋が多く集まる市場でスパイス、ドライフルーツ、ハーブティー、香木などを量り売りで購入出来る。



その後訪れたのが世界最大級の金市場ゴールド・スーク。300店舗以上が軒を連ね、市場入口の店では、ギネスに認定された重さ63kg、世界最大の指輪が展示されており、あまりの大きさに一同唾然。他にも金をまとった衣装やネックレスなどが陳列されており、目がくらむほどの眩い世界を体験できた。因みにゴールド・スークで販売される金の品質は政府によって厳しく管理されているので粗悪なものは

ないとのこと。ただ・・・参加者で金を買っていた人はおそらくいない。因みに1名現地の方のような恰好をしている人がいるが実は本会 Y 会員・・・。



### 【ドバイフレーム】

2018年1月にオープンしたドバイフレームは高さ150m・幅93mの巨大な黄金の額縁。2019年には「世界最大の額縁」として、ギネスにも認定された。フレームの上部は、ドバイの街を一望できるスカイデッキになっており、北側には歴史地区を、南側にはモダンなスカイラインを見渡すことが出来、ドバイの過去・現在・未来の景色を眺めることが出来た。なおスカイデッキの通路はガラス張りとなっており高所恐怖症の方は要注意。



### 【ブルジュ・ハリファ、ドバイモール】

ブルジュ・ハリファは高さ828m・163階建ての世界最大の超高層ビル。砂漠に咲くスパイダーリリーを抽象化した構造と、世界一の総重量のアルミニウムとガラスが使用された Y 字型のフロアーはドバイの工業技術の偉業とも言うべき建築物。ホテル「アルマーニホテル ドバイ」のほか、高級レジデンス、オフィス、レストランが入っている。124階の展望台からの景色は圧巻。急速に発展したドバイの街並みを見下ろすことが出来た。因みに建物内で最も高いエレベーター(504 m)、建物内の階数(163 階)、地上階から最も高いレストラン(441.3 m)など、複数の世界一記録を持つ。



ドバイモールは世界一の高層ビル「ブルジュ・ハリファ」に隣接する、ショッピング、レジャー、エンターテインメントのすべてを楽しめる世界最大のショッピングモール。1,200軒を超えるショップ、2軒の外資系デパート、何百軒



もの飲食店が集まっており、さらには世界一大きな水槽を有する水族館やスケートリンクもある。敷地面積

はサッカー場 200 個分の 100 万㎡。お土産を買うにもお店が多かえって悩んでしまった参加者も多かったのでは・・・。



ドバイファウンテンはブルジュ・ハリファすぐ横にあり 2009 年 5 月にオープンした世界最大の噴水。噴水の高さは 150 メートルに達し、噴水自体の長さも 275 メートルと圧巻の規模。音と光に合わせてまるで水が踊っているかのように見える噴水ショーは大変迫力があり素晴らしかった。なお噴水ショーは毎日、昼間数回と 18 時から 23 時まで 30 分ごとに開催されているとのこと。

## 【デザートサファリ】

かつての砂漠地帯だったドバイでは今でもデザートサファリを楽しむことが出来る。当日はホテルまで 4WD 車 6 台のお迎えがあり約 1 時間かけて砂漠地帯に移動。砂漠地帯に入る前にドライバーがタイヤの空気圧を低くした。これは空気圧を低くすることでタイヤがつぶれた状態になり、その分接地面積が増え砂の上でも十分なグリップを得ることが出来るようになるからだ。

砂漠では 4WD がジェットコースターのようにアップダウンを繰り返しながら砂漠を疾走、我々が選んだコースはあまり過激でないコースであったがそれでもかなり迫力あるドライブであった。一番ハードなコースでは一体どうなっていたのだろうか・・・。

途中、沈みゆく夕日をバックに記念撮影。360 度砂漠が広がる光景の中、参加者一同テンションが上がった記念撮影となった。

デザートサファリ後は砂漠の中にあるレストランで夕食。本格的な中東料理を食べながらアラビア音楽の生演奏や民俗舞踊、ベリーダンスなどのステージを楽しむことが出来た。また会場内ではラクダや鷹に触れることが出来た。



## TOPICS2 エジプト観光

### 【パピルスショップ】

ギザのパピルスショップでは最初にパピルス紙を作る説明があった。パピルスは三角形の茎をした 1～3m くらいの丈の植物。まず皮をむき薄く切り 1 週間から 2 週間水に付ける。水から引き揚げて皮を剥いで水分を取るため叩いたり麺棒で伸ばす。その後布の上で格子状に並べ互いしっかりプレスし乾燥させると出来上がり。街中ではバナナの繊維を使った偽物が多く出回っているので要注意。本物は繊維が縦横に交差しているが、偽物は単一方向だけの繊維となっており、また強度も弱いとのこと。パピルスはギザのお土産の定番であり、絵画やポストカード、しおりなどをお土産に買い求める会員の姿があちらこちらで見られた。



### 【大エジプト博物館】

当初はカイロのエジプト考古学博物館を視察予定であったが、日本旅行の現地エージェントのギリギリの調整により、訪問日前日に急遽大エジプト博物館を特別に視察することが可能になった。この大エジプト博物館は単一文明を扱う博物館としては世界最大級の規模を誇り約 20 年の歳月をかけて完成した。ギザの三大ピラミッドのすぐ近くに位置し、敷地面積は東京ドーム約 10 個分。館内には、エジプト考古学博物館から移された展示品を含め、王墓から発見された副葬品のコレクションなど 10 万点以上の遺物を収蔵し、そのうち 5 万点以上が展示されている。なお同館の建設にあたっては国際協力機構 (JICA) を通じ約 840 億円もの日本の支援があったほか、遺物の保存技術支援などにも日本が関わっているとのこと。

訪問日は 11 月 1 日のグランドオープン前だったこともあり入館出来たのは特別に許可を得た我々ともうひと団体の 2 団体のみ。実質貸切状態で現地のガイドの説明を聞きながら館内をゆっくり鑑賞することが出来た。入口で迎えてくれた巨大なラムセス 2 世像は迫力があり壮観。その先の大階段ではラムセス 2 世やハトシェプスト女王、トメス 3 世らが出迎えてくれた。館内は 4 つのフロア (古王国時代、中王国時代、新王国時代、ギリシャ-ローマ時代) と各フロアに設けられた 3 つのセクション (社会・王権・信仰) によって構成されておりフロアによって時代が分かっている仕組み。

ツタンカーメンの黄金のマスクは残念ながらエジプト考古学博物館からの移送準備のため見られなかったが、約 2 時間かけて貴重な展示物を間近で鑑賞することが出来た。特別な時間を参加者一同共有することが出来、大変満足のいく視察となった。



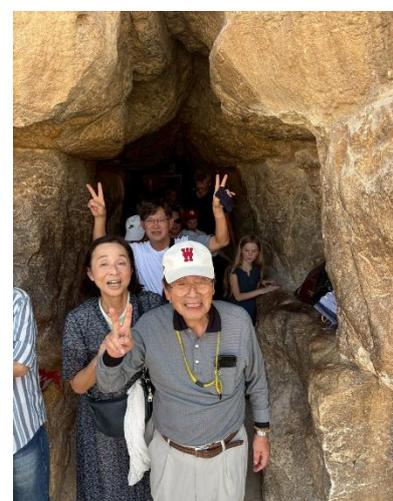
## 【スフィンクス】

ライオンの体に人間の頭をもつスフィンクスは、古代エジプトの神殿などでよく見られるポピュラーなデザイン。数あるスフィンクス像の中でも、ギザのスフィンクスは長さ 57m、高さ 20mもあり世界最大。古代においても砂に埋もれていたが、新王国第 18 王朝のトメス 4 世が掘り出したという記録が残っている。当日は普段入れないスフィンクスの足元まで入り、特別感を味わうことが出来た。



## 【ギザピラミッド】

ギザにある三大ピラミッドとは、古王国時代に絶大なる権力をもったクフ王、カフラー王、メンカウラー王の 3 人の王が造った 3 つのピラミッドのこと。一帯からはピラミッドに付随する遺跡群も見つかっており、4500 年前の様子を今に伝えている。因みに我々が上ったクフ王のピラミッドは一番大きいピラミッドで 1 辺の長さが 230 メートルで高さは 146 メートル。いざ中に入ると、ピラミッドを上る人と下る人がすれ違うことも難しいほどとても狭い階段を、所々頭をかがめながら急な階段を上っていくのである。風通しもなく温度や湿度も高い中、汗びっしょりになってたどり着いたのが「王の間」。ここは赤い花崗岩で作られたクフ王の大きな石棺が置いてあった。因みに今回の参加者で最年長の F 会員や K 会員も完登、元気な姿に参加者一同勇気づけられた。



## TOPICS3 ドバイ・エジプト あれこれ

### 【ドバイ】

ドバイでは走っている車は高級車が多く汚れた車は走っていない。なんと汚れた車は罰金が科せられるのだ。なんとなく白い車が多かったのは日差しが強いせいもあるがそういった理由もあるのかも……。高速道路は片側 7 車線や 8 車線と広くスピードを出す車も多い。無理な車線変更で割り込んでくるシーンをよく見たが、街中の監視カメラで見張られていることもあり交通ルールは守られている。

ドバイはほとんどがキャッシュレスの世界であり、ジェットロッドバイ事務所の中島所長によると、これまでキャッシュで払ったのはアブラ船乗船時とショッピングモールで洗車を依頼する時だけとのこと。なおメトロなどの公共交通機関では飲食は禁止。また他人の写真撮影も禁じられている。因みにあくまでホテルの近くではあったが、夜出歩くのも特に心配することもなく安心して出かけることが出来た。



### 【エジプト】

ドバイと違いエジプトを走っている車は総じて汚れておりきれいな車はほとんど見かけなかったといっても過言ではない。またエジプトの道路では信号や横断歩道が少ないので通行人が車の前を平気で横切る光景が至る所で見られた。これでよく交通事故が起きないのか不思議でならない。バイクはノーヘルメットの 2 人乗りが多い。車やバイクのクラクションが常にあちらこちらで聞こえるがそれは当たり前前の光景とのこと。これはクレームというよりは自車の存在を知らせるために鳴らしているケースがほとんどだとか。

エジプトでは金曜日と土曜日が休日。我々は木曜日の夜にエジプトに入ったため、仕事が終わって市場等に繰り出す人々を多く見かけることが出来た。また道路も仕事帰りや夜の街に繰り出す車で大渋滞が続き、夕食会場に到着したのは当初予定から 1 時間以上大幅にずれ込む 21 時。さすがに疲れがピークを迎えた。



# 参加者名簿

(敬称略)

No	氏名	所属先・役職	No	氏名	所属先・役職
1	谷澤 薫 【団長】	榊谷澤総合コンサルタント 代表取締役	15	田中 徳兵衛	セントラルインターナショナル榊 代表取締役社長
2	谷澤 恵子	令夫人	16	萩野 頼子	榊飯能製作所 代表取締役社長
3	古屋 久昭 【副団長】	日本自動機工榊 代表取締役社長	17	福岡 聡 【代表幹事】	榊埼玉りそな銀行 代表取締役社長
4	古屋 敦子	日本自動機工榊 取締役 令夫人	18	福田 秋秀	榊エフテック 最高顧問
5	石岡 紀子	株式会社財産アシスト 役員	19	福田 順子	令夫人
6	濱田 里英	榊T&S税理士法人 総務部長	20	藤池 誠治	榊デサン 代表取締役会長
7	伊田 登喜三郎	伊田テクノス榊 代表取締役会長	21	藤池 曠子	令夫人
8	岩崎 研太郎	岩崎興産榊 代表取締役社長	22	三上 俊樹	(株)三谷製作所 代表取締役
9	大久保 毅	税理士法人大久保会計 代表社員 税理士	23	森田 精一郎	三共木工(株) 代表取締役副社長
10	大久保 幸江	令夫人	24	山元 希企	山元榊 代表取締役
11	神田 広人	榊岩崎食品工業 代表取締役社長	25	吉村 光司	榊八洲電業社 代表取締役
12	栗原 忍	デイリーホテル榊 代表取締役社長	26	高橋 健一	榊日本旅行 埼玉法人営業部部长
13	河野 経夫	榊第一コーポレーション 代表取締役会長	27	濱根 亜矢子	榊日本旅行 添乗員
14	関 美子	榊セキ薬品 監査役	28	大石 克紀	埼玉経済同友会 専務理事・事務局長

以上28名



ドバイ未来財団にて記念撮影

発 行 者：埼玉経済同友会 国際委員会

発行責任者：大石 克紀

発 行 日：2026年3月9日（月）

さいたま市大宮区桜木町 1-7-5 ソニックシティビル 10F

電 話：048-647-4000

F A X：048-647-3845

メ ー ル：[saitamadoyukai@snow.ocn.ne.jp](mailto:saitamadoyukai@snow.ocn.ne.jp)

(本報告書の文責はすべて事務局にあります)



SAITAMA KEIZAI DOYUKAI